高齢者の話し方は遅くてわかりにくいか
—話しことばの世代差をみる試み—

遠藤　織枝

1．はじめに

高齢化社会が進むにつれ、高齢者に対する言葉の問題もクローズアップされてきている。たとえば、高齢者を扱ういろいろな施設でのことばの見直しの問題である。ある施設では、「おじいさん・おばあさん」などとは呼ばないで、その人の名前で呼ぶように指導している(注1)。呼称に関してそのような見直しがなされることは望ましいことであるが、一方で、外山(1999)は「年をとった人の話し方は一般にゆったりしている。ゆっくり進む。いつまでたっても肝心なことが出てこない」と言う。これはまた、大きい声で話すべき、話のスピードが遅いから、ゆっくり話すべき、高齢者は同じことを何度も繰り返してくどいから話し相手をしにくい、などのステレオタイプの思いこみ(注2)のひとつではないだろうか。高齢者に対するコミュニケーションを円滑にするためには、高齢者の話しことば自身を知ることが先決であろう。

高齢者のことばの研究としては、位相差を考えるものとして、西尾(1988)、遠藤(1993)、田中(1999)などがある。西尾は、老人ホームの高齢者と大学生を対象として、「ピンポン／卓球、後家／未亡人」などのセットについて、どちらを選ぶかを調べている。田中は年賀状のタイプで高齢者と中年層、低年齢層との違いを調べている。これらは、書かれたもので語彙の特徴を知ろうとしていて、高齢者の実際の話しことばを調べたものではない。また、遠藤は、前半で辞書の「老人語」の記述の問題点を指摘し、後半で放送された高齢者の話しことばから高齢者のことばの特徴をさぐろうとした。ここでは実際の話しことばを考察の対象としてはいるが、他の世代の話しことばとの比較をせず、高齢者のことばだけを一方的にみている。

実際に、高齢者は話し方が遅いのか、どのくらい若い人より遅いのか、繰

り返しが多いのかなど、高齢者の話しことばの実態を相対的に研究したものは寡聞にして、それを知らない。

今回は90歳以上の女性４人と、70歳以上の女性４人のスピーチの録音をもとに、それらの人物の発話が、同じ会でのより低い年代の女性話者の発話とどのように違うのか、あるいは違いが見られないのか、女性話者の間の世代差の有無を考えてみようとするものである。

２．スピーチの性質

99年夏、東京都内で開かれた２つのパーティーでのスピーチの録音を資料にしている。１つは90歳以上の女性の聞き書きを元にして出版された本の出版を記念する会のもの（「Ｓ」とする)、もう１つはアメリカ人の女性が退職したのをねぎらい、専門分野で教えを受けたこと、アメリカで世話になったことに感謝する趣旨の会のもの（「Ｖ」とする）である。いずれのパーティーも約50人の参会者によるもので、女性が圧倒的に多かった。

「Ｓ」は、本の共著者が主催し、90歳以上の聞き書きの対象者4人が、招待客として出席し、その他著者たちの同僚、友人、教え子などが参加した。

スピーチは、著者の側からの、その本が出版されるまでの経過報告、著者の師の出版を祝うもの、著者の友人たちの祝いの言葉、出版社社長の出版の意義と営業に関する発言、90代の女性たちの近況の報告などであった。

「Ｖ」は、主人公である60代のアメリカ人女性Ｖ（日本語がわかる）を囲んで、最初にＶに日本語を教えた日本語教師、Ｖが40年前に来日した時から知り合って友人となった人、Ｖにアメリカ留学中世話になった元留学生、Ｖが働く日本の病院の関係者、などが参加した。

このパーティーのスピーチは、Ｖとの40年来の友人の、２人が知り合ったころの思い出、元留学生の、留学中Ｖに世話になったことを感謝するもの、Ｖが働く日本の病院の関係者のＶの仕事ぶりを紹介する話などがされた。

これら２つのパーティーでスピーチをした女性話者の年代、出席したパーティーの区別、職業を次ページの表に示す。

年代	話者	パーティー	職　業
90代	A	S	評論家
	B	S	バー経営者
	C	S	織物作家
	D	S	医　師
70代	E	S	写真家
	F	S	大学教員
	M	V	評論家
	N	V	無　職
60代	G	S	地域活動家
	H	S	大学教員
	O	V	大学教員
	P	V	国会議員
	Q	V	大学教員

年代	話者	パーティー	職　業
50代	I	S	会社社長
	R	V	カウンセラー
40代	J	S	区議会議員
	K	S	大学教員
	L	S	研究者
	S	V	大学教員

3．考察の方法

このスピーチの中での発話を、それぞれ最初の60秒～90秒分を対象として、例１・２のように文字化する。単位の切り方は、国立国語研究所(1995)の短い単位の切り方に依拠している。

例１　ソシテ　ソレデ　カイガ　ナンカ　エンカツニ　ススムヨーニ　オモイマスノデ　マズ　サイショニ　クチビオ　キッテイタダク　カタオゴショーカイシマス、

例２　そして／それで／会が／なんか／円滑に／進むように／思いますので／まず／最初に／口火を／切っていただく／方を／ご紹介します／

このようにして得た、年代の異なる19人の話者の発話資料から、発話量、用いられた用語を比較しながら、ここでは、発話の速さ、なめらかさ、明快さ、丁寧さに着目して考察する。

3．1　発話の速さ

話し手の発話を、話された時間との関連でその速さを考えてみる。

杉藤(1999)は話し方のスピードを「ポーズからポーズまでを発話時間として、その時間に何拍（だいたい仮名文字にして何個）入るかを速度の単位」として、発話速度を計算している。この考え方をを参考にして、例１のよう

な文字化資料により拍数を数える。カタカナ表記の１文字分（キャ、シャなど拗音は２文字）を１拍と数え、それを発話の時間で割り、１秒当たりの拍数を出した(表１)。杉藤の計算によると、もっとも早口の話者は１秒当たり15.9拍、ニュースの早口のもの9.5拍となっている。遠藤の計算では、ポーズの時間を削除していないので、全体に１秒当たりの拍数は、杉藤より少なめになっている。

(表1) １秒あたりの拍数

話者		時間,秒	拍数	拍／秒
90代	A	91	390	4.29
	B	96	651	6.78
	C	88	613	6.97
	D	93	506	5.44
70代	E	79	505	6.39
	F	88	480	5.45
	M	70	403	5.76
	N	80	604	7.55
60代	G	70	441	6.30
	H	72	487	6.76
	O	66	438	6.64
	P	80	471	5.89
	Q	75	440	5.87
50代	I	84	434	5.17
	R	78	474	6.08
40代	J	65	450	6.92
	K	72	514	7.14
	L	82	571	6.96
	T	76	456	6.00
		1505	9328	6.20

(表2) 言いよどみの頻度

単位数	言いよどみ	言いよどみ／単位／%
87	15	17.2
116	4	3.4
128	0	0
100	7	7.0
97	9	9.3
91	9	9.9
83	7	8.4
122	2	1.6
92	18	19.6
98	2	2.0
96	7	7.2
84	10	11.9
79	7	8.9
90	21	23.3
101	11	10.9
92	6	6.5
97	14	14.4
111	20	18.0
87	15	17.2
1851	184	9.9

１秒あたり拍数の最も多い人、つまり最も話し方の速い人は70代Ｎで、最も拍数の少ない―話し方の遅い―人は90代のＡである。70代以上に最も速い人と最も遅い人がいるのである。19人の拍数の平均は6.20で、平均より速い人が90代、70代に各２人で、それらの年代の話者の半数である。また、50代は２人とも平均より遅いし、40代にも平均より遅い人がいる。これらは、話し方の速さは、年代差よりも、個人差の方が大きいことを示している。なお、杉藤は「ことばのスピード感には、ポーズの時間が密接にかかわっている」と述べているが、今回の分析ではポーズの計測は行えなかったので、ポーズ

との関係については明らかにできていない。

3．2　なめらかさ―言いよどみの頻度

言いよどみが多い話し方は、聞く側にとってはなめらかさに欠けるとの印象を受ける。文字化した資料から、「あのー、あの、なんか、えー、えーと」などを数えだし、例２のように切った単位の数を全体とする中での比率をだした(表２)。これを言いよどみ率と呼ぶことにする。

個人別でみると、言いよどみ率が最も高いのは、50代Ｉで、次いで60代Ｇ、40代Ｌ、90代Ａ、40代Ｔの順になっている。最も言いよどみ率が低いのは、90代Ｃで、１度も言いよどむことなく話しており、70代Ｎ、60代Ｈ、90代Ｂと続いている。90代Ｃがもっともなめらかな話し方をしていると言える。同年代でも90代０％～17.2％、70代1.6％～9.9％、60代2.0％～19.6％と言いよどみ率に大きな開きがあり、個人差の大きいことを示している。

ただし、言いよどみは、改まったり、緊張したときにおこりやすいので、このスピーチでのそれぞれの立場や役割などとの関連を考えなければならないかもしれない。

90代の４名はいずれも、招待客として参会者には共通の立場で対しており、最も緊張の少ない立場である。そのため、Ｃがなめらかに話しているとも言えるが、一方で、同じ90代のＡが言いよどみが多いことをみると、緊張感が言いよどみに影響を与えているとも言いきれない。19人の話者の中で、一度も言いよどむことなく、最もなめらかに話したのが90代Ｃで、高齢になると「肝心なことが出てこない」（外山）とは、相反する結果になっている。

3．3　表現・用語の明快さ

3．3．1　指示語句の使用

市川(1978)は「一般に、指示語の多い表現は、文脈への依存度の高い表現であると言える。指示語を適切に用いれば、叙述がひきしまり、明快で筋の通った文脈が生まれる。あるいはまた、陰影と流動性を帯びた文脈が形作られる。けれども、指示語を無反省に、また、あいまいに用いると、かえって、

不明確な、あるいは、冗文的な文脈が出来上がる恐れがある。」(p. 70)という。

また、年をとると、ことばがでにくくなり、「あそこのあれどこいった」というような指示語を多用する傾向があると言われる。指示語の使用が適切か否かを判断するのは、また、別の問題があるが、同じ量の発話の中の指示語の使用の状況をみることで、指示語の使用に年代的な差があるか否かをみる(表３)。

(表３) 指示語句の使われ方

年代	話者	指示語句使用数	計
90代	A	ああいう1　その1　そんとき1	4
	B	これ1　それ2　そういう2	5
	C	これ2	2
	D	こういう２　その2　それ1	5
70代	E	この2　この2	4
	F	この2　その1　こんな2　そういう1	6
	M	これから1	1
	N	こんな1　そこ1	2
60代	G	そこ2　それ2	4
	H	これ1　それ2　この1　その2　そこ2	8
	O	これから1　その2	3
	P	このような1	1
	Q	こういう2　その2	4
50代	I	こういう1　そういう1　この1　その2　これ1　これから2	8
	R	その2　そんな1	3
40代	J	こういう1　ここ1　この3　こんな1	6
	K	こう１　こういう１　これ1　その1	4
	L	その1　そちら1	2
	T	こう1　それ1	2
		平　均	3.89

各話者の指示語の使用回数を見るが、話者間の使用の多少を比べるには、発話量を等しくしなければいけない。そこで、発話の最も少ない話者の発話量—ここではQの単位数の79—にそろえて数えることにした(以下、(表4)(表5)(表6)でも、同じ数え方をしている)。なお、接続詞の「それから・それで」などは除外している。19人の指示語の使用回数平均は3.89回で、90代・70代とも、平均より多い人も少ない人もいる。最も多く使っているのは、60代Hと、50代Ｉの８回、最も少ないのは70代Mと60代Ｐの各１回である。

以上の数字を見るかぎり、年代的な傾向はみられない。つまり、年をとる

と、指示語を多く使うようになるという説は、パーティーのスピーチでは証明できなかったのである。

3．3．2　接続語句の使用

接続詞の使用について、市川(1977)は、「文間になるべく多く用いると(中略)はっきりとしてわかりやすく、論理的に整えられているが、その反面やや説明的な印象も与えるだろう（中略)。接続詞を接続助詞に置き換えると（中略)、なだらかに続く感じだが、同時に、少し長たらしい表現になる」(p107)、と述べ、また、「接続語句として、順接・逆接を示すものが多ければ、論理的明快さが感じられる」(p175)と述べている。接続語句の使用が表現の明快さを示す尺度となりうることを示している。そこで、19人の発話の接続語句の使用状況を調べ、表現の明快さに年代的な差があるかどうかを考察する(表4)。

（表４）接続語句の使われ方

		順接・逆接の接続語句		その他の接続語句		計
90代	A		0	それから・それじゃ	2	2
	B		0	ただ	1	1
	C	そうすると・そいで3・で	5		0	5
	D	しかし・それで	2	それから3・あるいは	4	6
			7		7	
70代	E	そいで・それで・で・だけど	4		0	4
	F	それで	1		0	1
	M	で・ですから	2		0	2
	N	それで・で	2	じゃ・そして	2	4
			9		2	
60代	G	それで	1	あと*	1	2
	H	そこで2・ですから	3	そして・それから	2	5
	O	それで・で	2	そいから・そして2	3	5
	P	そうしましたら・	1	つまり	1	2
	Q	で	1	あるいは	1	2
			8		8	
50代	I	それで	1		0	1
	R	それで2・ということで	3	そして・それから	2	5
			4		2	
40代	J		0	そして・と**	2	2
	K	それで	1	そして・それでは	2	3
	L		0	それから	1	1
	S	で	1		0	1
			2		5	
		個人平均回数	1.58		1.26	2.84

「あと」と「と」は以下のように使われていた。
*　Ｅさんとは親友なのか悪友なのかわかりませんが、今まで続いておりまして、あと、Ｋさんとさんとは・・・
**　・・大切な本をぺらぺらめくりながら感じます。と、女の百年の歩みと言うことをこの本を通じてまた・・・

19人の接続語句の使用回数平均は順接・逆接の接続語句で1.58回、その他の接続語句で1.26回である。論理的に明快な表現とされる順接・逆接の接続語句を最も多く使っているのは90代C、２番目に多く使っているのは70代Eである。つまり、高齢の人の方が論理的明快な話し方をしていることになる。一方、90代のAとBは、順接・逆接の接続語句を１語も使っていない。90代では、話し方の論理的明快さにおいて両極端の人がいることになる。

３．４　丁寧さ

３．４．１　自称詞と「ございます」

自称詞を「わたし・あたし」というか、「わたくし・あたくし」というかで、丁寧さに違いがあらわれているし、「うれしゅうございます」と言うか「うれしいです」というか、つまり、「ございます／です」「ございます／あります」に、丁寧さの差が現れているので、この二つの語の使用状況が、年代的な差があるか否かを調べてみる(表５)。

まず、自称詞について、「わたし／わたくし」のどちらか一方だけを使う人と、同一話者が「わたし」と言い、「わたくし」と言う場合もあるので、２語以上差がある場合に限り、多いほうの語をその話者の使用語と考えて、「わたし」派と「わたくし」派に分けてみる。

「わたし」派は、90代A、50代R、40代L・Sの４人、「わたくし」派は、90代C、70代E・F、60代P・Q、40代Jの６人である。「わたし」派、「わたくし」派とも、90代から40代まで、各年代にわたっていて、ここでも、年代差はみられない。

次に、「ございます」の使用についてみる。「ございます」を使う条件がなければ例は出てこないから、これは、それを使う条件・必要の有無と関連させてみる必要がある。つまり、「ございます」を使いうる条件の中で、使うか使わないかをみなければいけない。そのため、たとえば、「うれしゅうございます」に対応する「うれしいです」を、「ございます」の非使用として、使用、非使用の状況をみるのである。

全体では、「ございます」が多いが、この中には「おめでとうございます」など、決まった挨拶語にふくまれるものがあるので、それらを除くと、使用

・非使用は同数になる。

また、２語以上の差のある人でみて、使用派は、90代Ｂ・Ｄ、70代Ｅ・Ｆ、60代Ｐの５人、非使用派は、90代Ａ・Ｃ、40代Ｋ・Ｓの４人である。90代では、使用派、非使用派がいるが、使用派に50代、40代がいないこと、非使用派に40代がいること、50代の２人に「ございます」の使用例がゼロであることから、「ございます」は、年代の高い方により多く使われることがわかる。

（表５）自称詞と「ございます」の使われ方

年代	話者	自　称　詞			ございます	
			ﾜﾀｼ	ﾜﾀｸｼ	非使用	ｺﾞｻﾞｲﾏｽ(挨拶)
90代	A	あたし2・わたし2・わたしども	5	0	2	0
	B	あたくし	0	1	0	3
	C	わたくし2	0	2	2	0
	D	わたし・わたくし2	1	2	0	2(1)
70代	E	あたくし2	0	2	0	2
	F	あたくし・わたくし	0	2	1	3(1)
	M	わたし	1	0	2	1
	N	あたくし	0	1	0	1
60代	G	わたし・わたくし	1	1	1	1(1)
	H	わたくし	0	1	1	0
	O	わたくし	0	1	0	1
	P	わたくし3	0	3	0	3
	Q	わたくし2	0	2	0	1
50代	I	わたし	1	0	1	0
	R	わたし4	4	0	0	0
40代	J	わたくし3	0	3	1	0
	K	わたくし	0	1	3	1
	L	わたし2・わたしども・わたくしども	2	1	0	1(1)
	S	わたし3	3	0	2	0
					16	20(4)

３．４．２　その他の敬語の使用

自称詞・「ございます」以外の敬語の使用状況で、表現の丁寧さをみようとするものである。

話者の立場や、談話の向けられる対象によっても、敬語の使用は異なるので、使用された敬語の数だけで調べても意味がない。それらの敬語がだれに

向けられているかを、その場にいない話題の人物（話題）、パーティーの参会者（参）、パーティーの主人公（主）、パーティーの主催者（主催）、招待された客（招）、司会者（司）と、それぞれ区別しながら、その敬語を、尊敬語、謙譲語、丁寧語の３つの種類に分けて表にした。

（表６）敬語の使われ方

年代	話者	尊敬語		謙譲語		丁寧語		
90代	A	話題２	2		0		0	2
	B	話題８	8	話題・参	2	参３	3	13
	C	話題	1	参会者	1	参２	2	4
	D	話題	1	主催３・参３	6	参４	4	11
70代	E	話題･招･主催７･参	10	招3･話2･参3･主催3	11	参３	3	24
	F	話題・主催７	8	主催２	2	参４・主催	5	15
	M	主	1	主２	2	参２	2	5
	N	話題２	2	話題	1	参	1	4
60代	G	話題２	2	招２・主催	3	参・主催	2	7
	H	話題４	4	話題２	2		0	6
	O	主・参４	5	参	1		1	7
	P	主２・参４・主催	7	参３・司・主催	5	参３・主催	4	16
	Q	話題５・参２・主２	9	話題４・参４・司	9	参	1	19
50代	I	話題２・主催	3	主催・参	2	参	1	6
	R	話題・主	2	話題２・主・参	4		0	6
40代	J	招３	3	主催２	2		0	5
	K		0	話題・参２	3	参	1	4
	L	話題・参５	6	参３	3	参２	2	11
	S	主２・司	3	参２	2		0	5
計			77		61		32	170
平均			4.05		3.21		1.68	8.94

90代の話者は、すべて招待された客であり、年齢も高いので、参会者や、主催者に対しては、尊敬語は使っていない。しかし、第三者・話題の人物に対して多く尊敬語を用いている。近年の敬語では第三者に対する敬語が減っているといわれるが、この90代の話者たちには以前の敬語使用の傾向が残っているとみてよいかもしれない。

敬語全体の使用平均回数は8.94回だが、60代以上の話者には平均以上と平均以下がいる。一方、50代と40代は平均以下がほとんどである。40代Ｌは平均以上の回数を使用しているが、この場で40代Ｌは司会者の役をしていたためであると思われる。90代は敬語を必要としない場面だから、少ないのは当然だが、40代50代は、スピーチをした中では、最も低い年代で、その聞き手

は話者より年代や地位の高い人が多いから、本来なら敬語を最も多く使うべき立場のはずである。それがいちばん少ない敬語使用であるということは、（わずかな人数で断言はできないが）この年代が、上の年代より敬語を使わなくなっていることかもしれない。

4．まとめ

以上、速さ、なめらかさ、明快さ、丁寧さをもとに、90代から40代までの話者の話しことばを見てきた。速さでは、40代で、平均より速い人が他の年代より多いのは事実だが、他の年代ではどの年代も上の年代よりも速いということはない。最も速いのが70代、３番目に速いのが90代で、年代が高くても、40代50代より速い人もいて、高齢者の話し方が「ゆったりしている」とはかぎらないことがわかる。

なめらかさでは、言いよどみの回数でみるかぎり、年代の高さとは結びついていなかった。明快さでは、指示語句と接続語句の使用でみるかぎり、年代の差はみられなかった。丁寧さでは、自称詞では、年代差はみられなかったが、「ございます」の使用で、40代50代の使用が少ないという点での年代差がみられた。その他の敬語でも、50代以下がそれ以上の年代より少ない傾向にあった。

結論として言えることは、「ございます」の使用以外では、年代差は見られないというものであった。90・70代の女性が、１人を除いてすべて職業を持ち、社会的に活躍している・あるいは仕事をもっていたという特殊性も考えなければならないが、しかし、そういう意味では、それ以外の年代の女性もすべて職業をもっている人たちであるから、その特殊性は今回の話者グループでは、考慮しなくてもいいはずである。

わずかな人数を対象にしての調査であり、パーティーのスピーチという限られた話し言葉であるが、少なくとも、それらの中での発話には、話者の年代による差はほとんどみられなかった。高齢者は、ゆっくり話す、回りくどくてわかりにくいという思いこみを裏付ける結果は出なかった。今後もこのような具体的実際的な調査を続けて、より多様な資料を集め、実態に近づけ

たいと考えている。

注

注１　練馬区福祉公社(1999)『協力会員手帳』

注２　宇佐美まゆみ(1997)「高齢化社会のコミュニケーション環境整備のために](『言語』Vol.26・No.13)

参考・引用文献

市川孝(1977)『文章論概説』(教育出版社)

市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』(教育出版社)

遠藤織枝(1993)「「老人語」の特徴」(『日本語学』Vol.12・No.4)

国立国語研究所(1995)『テレビ放送の語彙調査Ⅰ―方法・標本一覧・分析―』(秀英出版)

杉藤美代子(1999)「ことばのスピード感とは何か」(『言語』Vol.28・No.9)

田中章夫(1999)『日本語の位相と位相差』(明治書院)

外山滋比古(1999)「現代社会とことばのスピード」(『言語』Vol.28・No.9)

西尾寅弥(1988)『現代語彙の研究』(明治書院)